

自然をめぐるエッセー 45

由井 浩

漱石山房記念館

今年、夏目漱石の生誕 150 年に当たる。この記念の年に新宿区早稲田南町にある漱石が晩年の 9 年間に暮した「漱石山房」と呼ばれる家が新宿区によって整備され、漱石の作品や生涯に関する展示室、図書室、旧居を再現した展示室などを備えた漱石山房記念館が 9 月にオープンした。

私は 2002 年 4 月から早稲田大学理工学総合研究センターで新しい研究プロジェクトを始めるに当たり、前年 11 月からの 5 ヶ月間地下鉄東西線早稲田駅近くにある早稲田大学喜久井町キャンパスの研究センター分室で準備活動を行った。着任初日に昼食を取るために早稲田駅近くを歩いていて「三四郎」という寿司店の看板を見つけ、何故ここに「三四郎」が？と疑問に思った。横断歩道を渡って通りの反対側に行き坂道を少し歩いたところで、この疑問



新宿区立 漱石山房記念館

はすぐに解けた。歩道の脇に「夏目漱石生誕の地」の碑が立っていた。坂道をもう少し上ったところに「夏目坂」の標識があり、漱石の父親が自分の姓をつけて呼んでいた夏目坂の名が人々に広まり地図にも載るようになったという、漱石の随筆「硝子戸の中」に書かれている話が紹介されていた。このあたりは漱石にゆかりのあるところだということを知って親近感が芽生え、「硝子戸の中」の文庫本を買って読み始めた。

漱石が晩年に住んでいた家は早稲田駅から徒歩 10 分ほどのところにある。大通り沿いではなく少し奥まったところにあるために今まで行ったことがなかったので、漱石山房記念館のオープンを機に 10 月初めにここを訪れた。

館内の展示室、図書室、旧居を再現した展示などを一通り見てから、入り口にあるガラス窓越しに外を眺めることができるカフェ“CAFE SOSEKI”に入った。ここで持参した「硝子戸の中」の文庫本を読み返し、館内の展示内容のメモを見ながら漱石の生涯について 認識を新たにした。



漱石山房記念館 CAFE SOSEKI

漱石は同い年の正岡子規と第一高等中学校で知り合って、寄席や野球、そして文学に共に熱中した。漱石が松山に英語教師として赴任した時には、記者として日清戦争に従軍して病気になって帰国した子規を 52 日間自分の下宿に泊めて面倒をみたほどの関係だった。

正岡子規が 34 歳 11 ヶ月の生涯を終える直前 8 年間に過ぎた鶯谷の子規庵では、足が不自由で外に出ることができなかつた子規が庭を眺めながら書き物をした特製の座卓が庭に面した南側のガラス障子の手前に置いてあった。子規はここに座って眺める庭の草花から大きな元気と詩想を得ていた。

「硝子戸の中」は漱石の最晩年に漱石山房で書かれた。旧居の書斎を再現した展示で、漱石がガラス戸の外を見ながら執筆している様子が想像できた。漱石も病に侵されていたが、体調が比較的良い時には執筆の合間や執筆を終えた後に庭の草木を眺めたり、散歩に出て外の自然に触れたりするのを楽しみにしていたようだ。

漱石の旧居の庭には葉鶏頭など沢山の植物が植えられていた。記念館の前庭と裏庭でも旧居の自然の再現が図られている。漱石が特別に愛でた芭蕉の木とトクサが裏庭入口や前庭に植えられている。漱石公園として整備された裏庭の花壇では葉鶏頭などの草花が柔らかい初秋の陽を浴びていた。

記念館の見学を終えて早稲田駅の方に戻って夏目坂を上り、ゆるやかに左に曲がったところにある蕎麦屋に入り、記念館のパンフレットなどを見ながら遅い昼食を取った。漱石の略年譜をもう一度読み、小説家としてのデビュー作の「吾輩は猫である」は 38 歳の作品、「坊ちゃん」はその翌年の作品、40 歳で漱石山房に転居してから 49 歳で亡くなるまでの間に「三四郎」、「それから」、「門」、「行人」、「こころ」、「硝子戸の中」、「道草」などの力作を次々に書き上げたという、遅咲きの文豪漱石の晩年のエネルギーに驚嘆した。蕎麦屋を出るときにもらったこの店のパンフレットに明治 40 年の創業と書かれていた。この年は漱石が漱石山房に転居した年だった。漱石も散歩の途中でこの店に寄ったかもしれないと思うと、親近感が一段と増してきた。



芭蕉の木とその下に生えているトクサ（砥草）



初秋の漱石公園